

〔29〕フィリピの信徒への手紙 3章 20-21 節
「私たちの本国は天にあります」

《1》

ロシアによるウクライナへの軍事的侵攻は、21世紀の現在でも現実にこういうことが起こり得るのだという認識を新たにさせると共に、「国」とは何か、ということも改めて考えさせられました。

国民、領土、主権が、確か国家の三要素と言われるものですね。このうち国民の一部は領土の外へ避難しなければならず、領土の一部は、ロシアによるいわゆる実効支配というものによって、奪われたも同然の形になっています。ただし、主権は損なわれることなく続いていることは、感謝すべきです。

ウクライナがこのような状況となったことには、いろいろなことが考えられるのですが、歴史的に中世頃まで遡るとキエフ公国と呼ばれる国家がそれなりに繁栄したことはあったようですが、それ以降、あまり強力な中央集権的な政治体制が確立されることがなかった、ということの一つの理由として考えることもできるでしょう。

個人としては、コサック兵として強い兵士たちでしたが、領土は絶えず、隣国のトルコとかポーランド、あるいはドイツ、ルーマニアなど、そして勿論ロシアによって奪われたり、取り返したり、ということが続いていました。

この世の国というのは、ウクライナのように不安定な中で悲惨と苦汁を嘗めたり、逆にロシアのように傲慢に他国に土足で入り込んで行ったりもします。

しかし、このような地上の、この世の国ではなく、今朝の御言葉は告げています。「しかし、私たちの本国は天にあります」。

パウロがこのように語るのには、前に述べていることとのつながりの中でのことです。パウロには少なからず敵がいました。彼らは、主イエス・キリストの十字架に敵対して歩んでいる者たちです。

彼らの実態というのは、腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えない、というものでした。

そのような彼らの行き着くところは、滅びのほかない。それで、彼らのことを悲しみ、涙ながらにパウロはフィリピ教会の兄弟姉妹たちに勧めます。私に倣う者となりなさい。つまり、主イエス・キリストに倣う者となりなさい。ただ、主イエス・キリストを見上げて歩みなさい。

十字架に敵対して歩む者の行き着くところは滅びだが、十字架の力に励まされ、この世の信仰の歩みを、前に向かってひたすらに走り続ける私たちには、本国が天にある。

本国という言葉には、本来あるべき国、といったニュアンスが伴います。外国に旅行していても、また多少長期に滞在していても、国籍は変わらないことが多いでしょう。極端な例が植民地で、国家主権を持つ本国が遠く離れていても、その植民地で本国の市民権を持つ者にとっては、本国こそ、自分の本来あるべき国、となるでしょう。いや、まさに自分は、本国に住んでいるのも同然である、ということになります。

このフィリピの町がそうでした。ここはローマ帝国の植民都市です。退役軍人など多くの者がローマの市民権を持っていました。

こういう事実がありますから、私たちの本国は天にあるという言葉は、フィリピの人たちには、すぐに理解できたし、またこれを聞いて、励まされたのではないのでしょうか。

なお、言葉の上で「本国」という言葉は、かつてはよく「国籍」とか「市民権」と訳されていました。

ギリシア語そのものでは、ステート（国）とか、コモンウェルスという言葉です。コモンウェルスというのであれば、政治的共同体、となるのでしょうか。

言葉のことで、ここはあまりこだわる必要はなく、国籍でも市民権でも本国でもいづれでもよいと思いますが、大切なことは、——国籍や市民権や本国は天にあるが、自分は今まさにこの地上にあって、いわばそのような権利を持ちつつも、その権利を持たない者であるかのように、世の恥辱に塗れて生きている、というのではない、ということです。

勿論、完全に聖くされてはおらず、途上の者に過ぎない私たちです。しかし、天に本国を持つとは、今、この地上にあって、必ずしも固有の本国そのものではないにせよ、その本国の植民地、出張所である本国において生きている、ということになるわけです。

ですから、十字架に敵対して歩む者たちとは、生きるその姿勢、目標において、あらゆる点で、決定的に違っているでしょう。既に、本国の保護と権利の中で、私たちは喜んで、希望を抱いて生きることができるからです。

私たちがこの世にあって、旅人である、ということは、ヘブライ人への手紙 11 章 13 節などでも言われています。いわゆる信仰者列伝の中で述べられています。

「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。遥かにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表わしたのです」。

また、ペトロの手紙一 2 章 11 節も、そうですね。「愛する人たち、あなたがたに勧めます。言わば仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい」。

確かにこの世にあっては仮住まいの身なのですが、それは地上に属する者ではないからですね。本国が天にある。そして、本国の守りと権利の中で今、支えられて、私たちは現実にこの世にあって、生きている。

だから、土にへばりついたような生きかたは、もはやしないでしょう。しかし、地の上に堅く立って、どこまでも力強く生きていく。これが地上を歩む旅人、信仰者の生き方です。

《2》

そして私たちは、主イエス・キリストが救い主として、そこから来られるのを、待っています。

これは主の来臨、再臨のことを告げている御言葉ですね。パウロ自身、自分が先に

天に召されるか、それとも主の再臨が先か、それはよくわからなかったでしょう。誰にもわからないことです。

直前の 12 節以下で言われているのは、主の再臨に先んじて、パウロがこの世の生涯を走り終えることを想定して、語っているようです。

一方、今朝の箇所では、主の再臨の時にもなお、地上で生きていた人たちのことが念頭に置かれているようです。

このへんの事情を、ウエストミンスター信仰告白で整理しておきたいと思います。

第 32 章「人間の死後の状態について、また死人の復活について」の第 1 節で、こう言われています。

「人間の体は死後、塵に帰り、朽ち果てる。しかし彼の靈魂は（死にもせず、眠りもせず）不死の性質を持っているので、直ちにそれを与えられた神に帰る。義人の靈魂は、その時に完全に聖くされ、最高の天に受け入れられ、そこで、彼の体の全き贖いを待ちながら、光と栄光のうちに神の御顔を見る」。

終わりの日より前に天に召された信仰者の体は、塵に帰ります。一方その靈魂は完全に聖くされ、体の全き贖いを待つ、とあります。

次に、終わりの日に生きていた人の場合について、同章 2 節「終わりの日に生存している者は、死を味わわないで変えられる。死人は皆、異なった性質をもってではあるが別のものではない、まったく同じ体をもって甦らせられ、彼らの靈魂に再び永久的に、結合される」。

同じく第 3 節「正しい者の体はキリストの御霊によって栄誉によみがえらせられ、キリストご自身の体に似る者とされる」。

そして、この第 3 節の妥当する範囲は、地上を生き、すべての信仰者ということになるでしょう。

それはまた、今朝の御言葉の 21 節「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、私たちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」と同じ内容です。

ですから、パウロは主の再臨の前と後とで、図式的に、教科書風に、どうこうと記すのではなく、一応、再臨の時に生きている人のことを念頭に置きながらも、自由に、死の後のことを書き記している、と言ってよいのでしょう。

なお、ここで主イエス・キリストが「救い主」として来られる、という表現が用いられています。

別に何の違和感もありませんし、聖書でよく言われていることだ、と私自身思います。

しかし、改めて調べてみると、救い主という言葉のパウロは、あまり使っていません。ローマ人にも、第 1 第 2 コリントにも救い主という言葉はありません。

テモテへの手紙一とテトスへの手紙において、よく出てきています。またパウロではなくペトロの著作となりますが、ペトロの手紙二にも割とよく出てくる。その程度です。

これは、この当時ローマ皇帝を救い主と呼んだり、異教において彼らの神を救い主と呼んだりする実例があったので、それらと混同されたり、同一視さえされたりしてしまうことのないように、あまり使いたくなかったのでしょうか。

しかし、ここでは使われています。誤解の余地がない、と思ったのでしょうか。本当の救い主はあなたの方だと、どうしても強調・確認しておきたかったのでしょうか。

主の再臨の時、私たちの卑しい体が変わえられる、とあります。

体自体、本来、卑しいものではありません。しかしここで、卑しい体と言われるのは、この肉の体には、死が伴っていることに留意しているからでしょう。そして、栄光ある体の前では、どの体も卑しいものになってしまうのは当然です。

ローマの信徒への手紙 7 章 24 節「私は何と惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、誰が私を救ってくださるのでしょうか」。

《3》

私たちを、主イエス・キリストは御自分の栄光ある体と同じ姿に変えてくださる、とあります。

同じことを告げている、いくつかの御言葉を見ておきましょう。

ローマの信徒への手紙 8 章 18 節「現在の苦しみは、将来私たちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思えます」。

コリントの信徒への手紙一 15 章 42、43 節「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときは弱いものでも、力強いものに復活するのです」。

コリントの信徒への手紙二 3 章 18 節「私たちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造り変えられていきます。これは主の霊の働きによることです」。

コロサイの信徒への手紙 3 章 4 節「あなたがたの命であるキリストが現われるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう」。

このように、私たちが終わりの時、主の栄光ある体と同じ姿に変えられることは、聖書の堅い約束です。

そして、ここに完全な、私たちの救いがあります。

そして、これは必ず、実現されることです。なぜなら、主にはそれだけの御力と權威とがあるからです。

甦られた主について、いくつかの御言葉を見ておきましょう。

ローマの信徒への手紙 1 章 4 節「聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです」。

同じく 8 章 34 節「誰が私たちを罪に定めることができますでしょう。死んだ方、否、むしろ復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、私たちのために執り成してくくださるのです」。

コリントの信徒への手紙一 15 章 25、26 節「キリストはすべての敵を御自分の足の

下に置くまで、国を支配されることになっているからです。最後の敵として、死が滅ぼされます」。

以上、力ある神の子が、私たちのために絶えず執り成しをしてくださっており、死をも打ち滅ぼす御力をもって、すべてのことを支配されています。

ですから、私たちは、生きるにも死ぬにも、主イエス・キリストと共にあって、少しも揺らぐことなく、ただ主にすべてを委ね、思いきり、前に向かってひたすらに走るのです。

主イエス・キリストと同じ形に変えられることを望むことなしに、救いはありえません。そして、この望み、希望は、いつまでも続きます。

私たちは本国から主イエス・キリストが救い主として来られるのを、待っています。

しかし、それは漫然と電車を待つかのように、待つものではありません。

迎える準備も万端に、心から主が来られることを、待ち焦がれるのです。

それは、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、ひたすらにこの世における信仰の旅路を、走り抜くことです。

主が、どうかそのような私たちの歩みを、さらに励まし、祝福してくださいますように。

2022年5月29日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

私たちの本国は天にあります。そこから救い主として主イエス・キリストが来られるのを、私たちは待ち焦がれています。そして、日々、信仰の歩みを走り抜いています。

そして、遂には私たちが、主の栄光ある体と同じ形に変えられることにより、救いが全うされることを待ち望んでいます。

ここに、まさに終わりの日に向かって歩みゆく私たちの姿が、凝縮されて描かれています。

どうか、神さま、私たち一人一人と、また教会の歩みがそのようなものとして、されに整えられ、励まされ、導かれますように。

主イエス・キリストの御霊が力強く、教会と一人一人に、臨んでください。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司